人と人とのつながりが薄れる今だからこそ大切なもの
～子ども食堂「すこやかサタディ」の活動実績～

清水優花

論文要旨

本稿では筆者の参加する子ども食堂「すこやかサタディ」がコロナ禍においてどのように活動しているのか、その活動内容の変容を明らかにする。また、支援を受ける子ども・支援をする大人、両当事者の声を聞き、コロナの時代と寄り添っていかなければならない子ども食堂のこれからについて思案する。第一章ではこれまでのすこやかサタディについてまとめた。そこで、子どもの学習支援事業「ステップ」が高浜市の生活困窮者自立支援法のうちの一つとして始められ、その活動を行っていく中で夕食を支援する必要に気づき、子ども食堂として「すこやかサタディ」が誕生したことがわかった。第二章では本稿の目的の一つ目である学習支援事業と子ども食堂の活動内容の変化が明らかとなり、学習支援では 2～3 人の生徒に対してチャレンジサポーターが一人という制度が 1 対 1 に。イベントの開催は軒並み中止で、昼食支援は人数を半分に分け二部制となった。子ども食堂は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、地域共生型福祉施設「あっぽ」が利用不可となり、活動を弁当配布に切り替えた。筆者の支援活動参加記録においてはメニューと人数、寄付食材などを記録。第三章ではすこやかサタディを利用する子どもたちにアンケート調査を行い、計量テキスト分析「KH Coder」を用いて子どもたちの感想を分析。弁当には好感を抱いており、感謝していることがわかった。次に質的調査の半構造化インタビューを行い、大人の想いを調査。子ども食堂及び学習支援事業の立ち上げの詳しい経緯と子どもたちに対する想いが明らかとなった。最後に終章にて本章のまとめを行い、今後の課題を示した。一つ目の課題は高浜市の北と南に一つずつ子ども食堂を立ち上げること。既に南にはすこやかサタディが存在するため、北に新たな子ども食堂を作り上げることが今後の課題となろう。もう一つの課題はこの活動を辞めないこと。コロナ禍において人と人とのつながりが更に薄れている今だからこそ、子どもの支援活動はやめてはならない。

序章　はじめに

本稿ではコロナ禍であるいま、筆者の参加する子ども食堂「すこやかサタディ」がどのように活動しているのか、その活動内容の変容を明らかにする。また、支援を受ける子ども・支援をする大人、両当事者の声を聞き、コロナの時代と寄り添っていかなければならない子ども食堂のこれからについて思案する。

子ども食堂とは、地域の子どもやその親に対して無料または安価で栄養のある食事や団らんを提供するための日本の社会活動である。2008 年から子どもの貧困問題が社会的に注目されるようになり[1]、2013 年には「子どもの貧困対策の推進に関する法律」（平成 25 年法律第 64 号）が可決された。厚生労働省によると、2018 年の 17 歳以下の子どもの貧困率は 13.5%[2]であり、約 7 人に 1 人が貧困状態にある。特に厳しい状況に置かれているのがひと

[1] 阿部彩，2017，『子どもの貧困Ⅱ－解決策を考える』，岩波書店，ⅰ項.
[2] 厚生労働省，2019，「国民生活基礎調査」，貧困率の年次推移表

り親世帯に属する子どもたちだ。日本の母子世帯は他の先進諸国に比べても就労率が高く、ワーキング･プアが多い[3]。よって、親が仕事で家を留守にする頻度が高まり、孤食となる子どもが増えている。このようにして起きる子どもの孤食を防ごうと始まったのが子ども食堂である。子ども食堂 1 号店ともされる東京都大田区の「気まぐれ八百屋だんだんこども食堂」代表の近藤博子は、近隣小学校の副校長から「ひとり親で、給食以外の食事はバナナ 1 本という子どもがいる」と聞いたことをきっかけに子ども食堂開設に至ったという[4]。この社会活動は全国各地へと広がり、2016 年 5 月に 319 か所[5]であった子ども食堂の数は 2020 年 12 月時点で 5,086 か所まで及んだ[6]。

もはやある種の子ども食堂ブームのなか、筆者の参加する子ども食堂「すこやかサタディ」は 2017 年 4 月に開設された。月に 2 回、第二･第四土曜日に地域共生型福祉施設あっぽ（愛知県高浜市田戸町三丁目 8 番地 21）にて行われ、子ども無料・大人 300 円で食事が提供される。詳しくは後述の「子ども食堂について」の項目を参照されたい。すこやかサタディに参加する子どもたちの大まかな 1 日のスケージュールは、午前中から夕方までいきいき広場（愛知県高浜市春日町五丁目 165 番地）で学習支援･昼食支援を受け、その後ボランティアスタッフの送迎で地域共生型福祉あっぽ（以下、あっぽとする）へ移動する。到着した子どもたちは食事が出来上がるまで卓球やダーツ、カラオケなどで遊びながら食事を待つ。食事は 18 時に出来上がり、ボランティアスタッフを含む皆で食卓を囲い、談笑しながら晩御飯を食べる。食べ終わった子から各自食器の片付けをすませ、帰り際にお菓子の詰め合わせを受け取って 19 時頃解散という流れだ。

しかし、今日ではあっぽでの食事支援活動は中止となっている。2020 年 1 月に中国･湖北

（2020 年 11 月 10 日にアクセス）.

	1985 (昭和60)年	1988 (63)	1991 (平成3)年	1994 (6)	1997 (9)	2000 (12)	2003 (15)	2006 (18)	2009 (21)	2012 (24)	2015 (27)	2018 (30)	新基準
	（単位：%）												
相対的貧困率	12.0	13.2	13.5	13.8	14.6	15.3	14.9	15.7	16.0	16.1	15.7	15.4	15.8
子どもの貧困率	10.9	12.9	12.8	12.2	13.4	14.4	13.7	14.2	15.7	16.3	13.9	13.5	14.0
子どもがいる現役世帯	10.3	11.9	11.6	11.3	12.2	13.0	12.5	12.2	14.6	15.1	12.9	12.6	13.2
大人が一人	54.5	51.4	50.1	53.5	63.1	58.2	58.7	54.3	50.8	54.6	50.8	48.1	48.2
大人が二人以上	9.6	11.1	10.7	10.2	10.8	11.5	10.5	10.2	12.7	12.4	10.7	10.7	11.3
	（単位：万円）												
中央値 (a)	216	227	270	289	297	274	260	254	250	244	244	253	245
貧困線 (a/2)	108	114	135	144	149	137	130	127	125	122	122	127	122

注：1) 1994（平成６）年の数値は、兵庫県を除いたものである。
2) 2015（平成27）年の数値は、熊本県を除いたものである。
3) 2018（平成30）年の「新基準」は、2015年に改定されたＯＥＣＤの所得定義の新たな基準で、従来の可処分所得から更に「自動車税・軽自動車税・自動車重量税」、「企業年金・個人年金等の掛金」及び「仕送り額」を差し引いたものである。
4) 貧困率は、ＯＥＣＤの作成基準に基づいて算出している。
5) 大人とは18歳以上の者、子どもとは17歳以下の者をいい、現役世帯とは世帯主が18歳以上65歳未満の世帯をいう。
6) 等価可処分所得金額不詳の世帯員は除く。

[3] 阿部，前掲書，13 項.

[4] 松崎翼，「【TOKYO まち･ひと物語】「子ども食堂」の名付け親　近藤博子さんーふらっと立ち寄れる場所に」『産経新聞』産業経済新聞社，2019 年 2 月 5 日東京朝刊 22 面.

[5] 「子ども食堂、330 か所超す貧困･孤食、広がる地域の支援」『朝日新聞』2016 年 7 月 2 日朝刊一面.

[6] NPO 法人全国こども食堂支援センター・むすびえ，2020,『こども食堂全国個所数調査 2020 年版』(2021 年 1 月 3 日にアクセス).

省武漢市で新型コロナウイルス感染症が蔓延し、日本でも感染者が増加し始めたことにより、あっぽは 3 月から外部の人間による施設の利用を不可とした。認知症高齢者グループホーム施設であるあっぽは、そこに暮らす高齢者への感染拡大のリスクを防止するためいち早く対応したのである。よって、すこやかサタディは子ども食堂を行う施設を失い中止となった。他にも子ども食堂の開催を困難にする要因がある。前述のとおり、子ども食堂では向かい合って皆で食卓を囲い、談笑しながら食を共にする。同じ学校の友達や別の学校の友達、先輩、後輩、ボランティアスタッフの大人、大学生スタッフなど、様々な人と交流し、会話することで地域社会とのつながりを構築していく。この社会活動は生活困窮家庭に属する子どもの孤立を防ぐため人と人とのつながりを提供する、そんな憩いの場の機能も併せ持つ。それはコロナ禍において、寧ろ密を作る作業といえよう。飛沫感染する新型コロナウイルスの感染拡大を未然に防ぐため三密（密閉、密集、密接）は避けて過ごすよう求められている中、子ども食堂の活動を行うことは非常に困難である。NPO 法人全国こども食堂支援センター・むすびえが子ども食堂を運営する 35 都道府県 231 団体に実施した第 1 回「こども食堂の現状＆困りごとアンケート」によると、4 月時点での子ども食堂の運営状況は開催が 10%、休止が 38.5%、お弁当や食材等の配布が 46.3%であった[7]。

このような状況を受け、すこやかサタディは 3 月に一時中止したものの 4 月から新たに弁当の配布による食事支援を始めた。本稿ではこの対応に至った経緯や活動内容の変容を記録し、コロナ禍における子ども食堂の在り方について思案する。第一章ではこれまでのすこやかサタディについてまとめ、第二章にて活動内容の変化の様子と筆者の参加記録を記す。第三章ではすこやかサタディを利用する子どもたちにアンケート調査、その子どもたちを支える大人にインタビュー調査を行い、両者の心の内を明らかにする。最後に終章にて本章のまとめを行い、今後、コロナの時代と寄り添っていかなければならない子ども食堂の課題を示す。

第一章　すこやかサタディとは

子どもの貧困対策の一環として始まった子ども食堂だが、その実、あまり貧困対策としての機能を果たしているとは言えない。というのも、子どもの貧困は見えづらく、支援の手を

[7] NPO 法人全国こども食堂支援センター・むすびえ，2020，「第 1 回　こども食堂の現状＆困りごとアンケート調査」，こども食堂の実施状況表（2020 年 11 月 27 日にアクセス）.

4 月

回答	軒数	%	%
通常どおり開催	9	3.9	10
通常より回数を増やして開催	5	2.2	
通常とは異なった開催	9	3.9	
お弁当の配布	49	21.2	46.3
食材等の配布	51	22.1	
食材等を宅配	7	3	
休止・延期	89	38.5	38.5
検討中	11	4.8	4.8
その他	1	0.4	0.4
計	231	100	100

差し伸べるべき子どもの発見が困難を極めるからである。現代の子どもの貧困とは、「相対的貧困」状態であり、その人が暮らす地域社会の生活基準を下回っている状態だ。生活困窮家庭では親が収入を得るため家を留守にする事が多く、ひとり親家庭では子どもは親との離別・死別により精神面や経済面で不安定な状況に置かれるとともに、日ごろから家族と過ごす時間が少なく、家庭内でのしつけや教育が十分に行き届きにくい。また、学習塾やスポーツクラブなどの課外活動にかける資金や時間の余裕もないことから、生活困窮家庭に属さない子どもたちとの間にさまざまな機会格差が生じる[8]。このような機会格差を可視化することは難しく、持ち物や身なり等から一見して生活に困窮していると判断できない。よって、生活困窮家庭に属する子どもは不透明な状態となってしまっている。そこで、多くの子ども食堂では参加者に制限を設けず、誰でも参加可能な地域の居場所として運営している。こうして集まった不特定多数の人の中に、少しでも支援を必要とする子どもが含まれていれば良し、といった形だ。昨年、ゼミで行った愛知県の子ども食堂 59 団体に実施した調査ではこのようなスタイルで運営する子ども食堂が 9 割を占めたことから[9]、大半の子ども食堂は地域の憩いの場としての機能を果たしているといっていいだろう。残りの 1 割は対象者を生活困窮家庭に属する子どもに限ったものとし、子どもの貧困対策として子ども食堂を運営している。すこやかサタディは、この 1 割の中に含まれる子ども食堂である。貧困状態が可視化しづらい中で支援を必要とする子どもを見つけ出し、更に子ども食堂の参加につなげている。では、どのように生活困窮家庭に属する子どもをすこやかサタディへ参加するよう促したのだろうか。そもそも、すこやかサタディはなぜ立ち上げられたのか。その経緯を一章にてまとめていく。

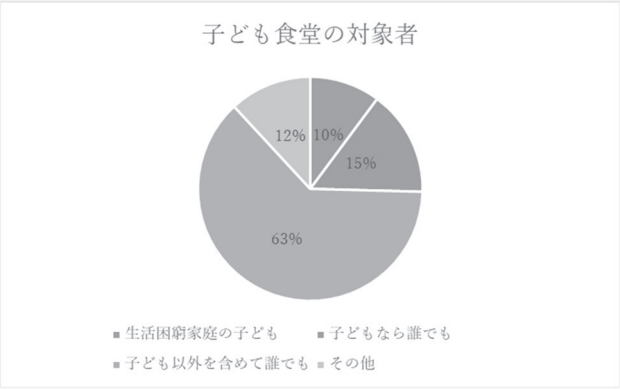
第 1 節　高浜市の子どもの学習支援事業

すこやかサタディの立ち上げの経緯と支援を必要とする子どもたちと子ども食堂をつなげるための方法を説明する上で、まず高浜市の生活困窮者に対する支援事業について説明

---

[8] ロバート・D・パットナム，2017,『われらの子ども－米国における機会格差の拡大』，株式会社創元社出版，196-206 項.

[9] 中京大学現代社会学部成元哲ゼミナール，2019,「子ども食堂に関するアンケート調査（運営者)」，子ども食堂の対象者



その他の意見には「子どもから高齢者まで誰でも，保護者も」との回答があったため，これは実質「子ども以外を含む誰でも」の項目と同意と捉えていいだろう.

する必要があろう。

高浜市では、地域福祉グループを代表とする「生活困窮者自立支援事業」[10]が実施されている。これは生活困窮者自立支援法(平成 25 年法律第 105 号)に伴い、2015 年 4 月 1 日から開始され、高浜市内に住む、生活に不安を抱えている人々に無料で自立に向けた支援を行うものだ。支援内容は⑴自立相談支援事業、⑵住居確保給付金事業、⑶就労準備支援事業、⑷家計相談支援事業、⑸子どもの学習支援事業、⑹子ども健全育成支援員による支援、⑺アウトリーチ支援事業の七つがあり、高浜市いきいき広場 2 階「たかはま自立相談支援センターこころん」にて、平日の午前 8 時 30 分から午後 5 時まで相談を受け付けている。

支援事業のうちの一つである⑸子どもの学習支援事業がすこやかサタディと関係があり、これが高浜市の生活困窮者自立支援事業について説明した所以である。その関係とは、学習支援事業を受ける子どもたちとすこやかサタディに参加する子どもたちはほとんど同じであることだ。高浜市が市内の生活困窮家庭に属する子どもたちに行う支援は、学力向上のための支援のみならず、食事の支援も行う手厚い制度となっている。市のホームページではこの学習支援事業について、「経済的に厳しい状況に置かれたひとり親家庭が増加傾向にある中、こうした家庭の子どもたちが、その生まれ育った環境によって左右されることなく、夢と希望を持って成長していける地域社会の実現を目指し、ひとりで過ごす時間が多い小学校の子どもたちに対し、学習等の支援を行います」[11]と述べている。また、事業の運営を学校と地域をつなぐ専門家である特定非営利活動法人アスクネット[12]に委託しており、この活動に対する意欲を感じる。市ではこの事業を「ステップ」と名付け、対象年齢ごとに支援を行っている。

第 2 節　ステップについて

高浜市は子どもの学習支援事業の目的を「親の所得に関わらず、子どもが十分な教育を受け社会に貢献する人材として自立すること」としている。市役所の福祉部は、「近い将来、人口が減少局面を迎えるなかで、こうした地域の将来の担い手を育てる取り組みがこれか

---

[10] 高浜市ホームページ，2020，「高浜市生活困窮者自立支援事業の概要パンフレット」（2020 年 11 月 27 日にアクセス）.

[11] 高浜市ホームページ，2020，子どもに対する生活・学習支援事業（2020 年 11 月 27 日にアクセス）.

[12] キャリア教育コーディネーターとして，学校と社会とをつなぐ教育のサポートを行っている NPO 法人．活動内容は地域で活躍する市民を学校に招いて授業を開催することや年間を通じたキャリア教育の効果的なプログラム計画，インターンシップのプログラム設計など.

らの地域社会にとってなにより重要」[13]と述べ、特定非営利活動法人アスクネットに事業委託し、2015 年 7 月 25 日から学習支援事業「ステップ」を実施した。

ステップの対象者は高浜市に在住する生活困窮世帯（生活保護受給世帯や就学援助受給世帯等）に属する中学生・高校生、その他支援が必要と認められる者であり、自らの足で開催場所（高浜市いきいき広場 3 階）に来られる者となっている。日程は毎週土曜日の午前 9 時 30 分から午後 16 時までである（図 1）。夏休みには毎週火曜日・木曜日・土曜日の週 3 回と、開催回数が増える。利用料は原則無料で、支援内容は「学習支援」、「イベントの実施」、「食事の提供」の三つ。

利用者は市内の中学校の担任の先生方の協力や、子ども健全育成支援員[14]の配置によって確保している。具体的に、中学校の担任の先生方にはクラスで支援の必要そうな目ぼしい生徒に対して家庭訪問の際などにステップのチラシを渡し説明して貰い、子ども健全育成支援員には家庭児童相談員から相談のあった不登校の子どもをステップの支援につなげてもらうなど、個々の子どもの状況に応じて適切に利用勧奨を行っている。

【図 1】ステップでの 1 日の流れ

（出典：「ステップ」チラシ）

ステップはこれらの事業をアスクネットのスタッフや「チャレンジサポーター」なる大学生を中心とした学習ボランティア、地域の協力団体等、さまざまな立場の人によって支援し、子どもたちの成長を後押しする体制となっている。

第 1 項　学習支援

ステップでは生徒の習熟度や希望に合わせて学習することによって、学習意欲の維持や自ら学ぶことができる姿勢の育成を目指す。また、勤労観や職業観を育成する支援、希望す

---

[13] 高浜市こども貧困対策会議第 1 回，2016，「資料 2：高浜市学習支援事業の概要−生活困窮家庭・ひとり親家庭の子どもたちの健やかな成長をサポート−」2 項.

[14] 市役所福祉部と教育委員会，学校，地域の関係団体等との「つなぎ役」として貢献．不登校やひきこもり等の問題を抱える若者またはその家族からの相談に応じ，必要な情報の提供や，専門的な指導・助言を行う．また，問題を抱える若者に寄り添いながら伴走型の支援を行うとともに，相談者の状況と相談内容等から，適切な関係機関の支援につなげる．

る進路への支援等を行う。

普段の学習サポートは、チャレンジサポーター1 名に対して生徒 2〜3 名のグループ学習となっている。宿題の提出や定期テストの成績アップに向けて目標を決め、振り返りをするなど工夫を凝らしながら学習する。また、他学年の生徒と一緒に学習することで勉強の悩みや学校のことについて相談ができ、学年や学校の枠を超えたつながりも構築できる。教材についてはステップに教科書や辞書が置いてあるため不要。各自学校の宿題を持参し、進めている。

これまで紹介した学習支援は対象を中高生とし、ある程度自分のことは自分で出来る者（生徒一人でいきいき広場に通える等）向けの支援だったが、高浜市が行う子どもに対する生活・学習支援事業はもう一つ存在する。それは小学 4 年生から 6 年生を対象とした学習サポートである。

小学 4 年生以上の小学生を対象とした学習サポートはその名を「ステップ・ジュニア」とし、2018 年 4 月に開始された（2016 年度からひとり親世帯の 4 年生以上の小学生に対する生活・学習支援事業「あすたか」が行われていたが、2018 年にステップと統合された[15]）。この、ステップ・ジュニアとステップの違いは日程とスッタフによる送迎の有無の二点だ。まず日程についてだが、毎週木曜日と土曜日の 2 回開催され、夏休みには毎週火曜日・木曜日・土曜日の 3 回開催される。そして時間はⒶ学期中の平日、Ⓑ第一・第三・第五土曜日と長期休暇中の平日、Ⓒ第二・第四土曜日と三つに分けられる（図 2）。スタッフによる送迎については、小学生がひとりで出歩くことは危険なため、万が一に備えていきいき広場まで送迎することが条件となっている。集合場所は高浜市内の各小学校で、往路のみスタッフが送迎を行う。平日の帰りは夜も遅いため、保護者に対してお迎えをお願いしている。

じかんわり

Ⓐ（学期中の平日）

時間帯	活動内容（予定）
16:00〜16:30	受付・はじめの会
16:30〜17:15	第1ターム
17:15〜18:00	マイターム おやつの時間
18:00〜18:45	第2ターム
18:45〜19:00	ふり返り おわりの会

Ⓑ（第1・第3・第5土曜日）（長期休暇中の平日）

時間帯	活動内容（予定）
9:00〜9:30	受付
9:30〜9:45	はじめの会
9:45〜10:30	第1ターム
10:30〜11:00	マイターム おやつの時間
11:00〜11:45	第2ターム
11:45〜12:00	ふり返り おわりの会

Ⓒ（第2・第4土曜日）

時間帯	活動内容（予定）
13:00〜13:30	受付
13:30〜13:45	はじめの会
13:45〜14:30	第1ターム
14:30〜15:00	マイターム おやつの時間
15:00〜15:45	第2ターム
15:45〜16:00	ふり返り おわりの会

【図 2】ステップ・ジュニアの時間割（出典：「ステップ・ジュニア」チラシ）

第 2 項　イベントの実施

[15] 高浜市役所ホームページ，2018，「第 5 回高浜市こども貧困対策会議」資料 4（2020 年 12 月 20 日にアクセス）.

ステップの二つ目の支援内容は地域との関係性づくりを意識したイベントの実施である。月に 1 回程度、地域の方々や社会人講師を招き、交流を深めるイベントを実施し、関係性の創出を図る。また、体験活動や生徒自身のキャリアを考えるイベントを実施し、生徒の将来を描くことが出来るような支援を目指す。
これまでに行ったイベントには、お仕事体験講座や映画監督による講話、絵本作りなど将来のつながりを見つける講座を実施している「みらいワーク」、地域の方との流しそうめん大会やバレンタインのお菓子作り、留学生との交流でおにぎり作りなどを行った「ぜっぴんクッキン」、チャレンジサポーターが大学で学んでいることを活かしたオリジナル講座など、ステップの生徒やチャレンジサポーターが自分たちで企画する「ステップのわくわく学校」がある。

第 3 項　食事支援

ステップの三つ目の支援内容は地域団体の協力による昼食の提供である。ステップの学習支援の時間割は図 1 にて示した通り、朝から夕方まであり、昼食の時間を挟むことになる。毎度食事を用意することは難しいだろうと、ステップでの昼食支援が始められた。ステップ・ジュニアの生徒は図 2Ⓑの時間割では昼食支援を受けたのち解散、図 2Ⓒの時間割では昼食支援からの参加となる。生徒たちには 1 食 100 円で栄養バランスのとれた食事を提供し、生徒やステップのスタッフ、チャレンジサポーター、地域の協力団体の全員で一緒に食事をし、交流を深める。食後は、生徒たち自身で食器の後片付けを行う。

子どもたちに「自分たちを支えてくれる大人が地域にはこんなにたくさんいる」ということを知ってもらいたいという想いから、特定の 1 団体に委託するのではなく、多くの団体に協力を要請している。2020 年現在では 16 団体[16]の協力を得て支援を行っており、その体制はステップの担当者である地域福祉グループの職員が予定を組み、調理担当となる地域の協力団体はそれに合わせ交代制で支援する仕組みだ。食材については、市民の方々や JA・企業等からの寄付、高浜市役所による米・保存食等の提供によってまかなわれる。また、生徒たちから回収し、集まった 2,000 円前後の資金とたかはま子ども食堂支援推進協議会が設立した「こども食堂支援基金」から各協力団体に奨励金として 3,000 円が支払われる。各協力団体には、それらの資金を用いてその他必要な食材の調達をお願いする形となっている。

第 3 節　子ども食堂について

以上が学習支援事業「ステップ」の活動内容である。次に第 3 節では子ども食堂について説明していく。子ども食堂「すこやかサタディ」はステップとは運営が異なり、代表は特定非営利活動法人高浜南部まちづくり協議会の子どもグループである。特定非営利活動法人高浜南部まちづくり協議会（以下、南部まち協とする）とは「自分たちのまちの問題は自分

---

[16] 高浜南部まちづくり協議会，吉浜まちづくり協議会，高浜市更生保護女性会，高浜市食育ボランティア，特定非営利活動法人だいずキッズ，特定非営利活動法人ハッピーパワー，高浜市民生児童委員協議会，高浜市農村生活アドバイザー，翼小飛翔の会，港小おやじの会，商工会女性部，NPO 法人ファザーリングジャパン東海，チーム佐々木，ゆかいな大人たち，ふるふる，アスクネット

たちで解決する」といったモットーのもと、地域住民の為に活動する地域分権団体だ。高浜市立港小学校区内の住民や各種団体が互いに協力し、住民相互の連帯感と自治意識の向上を図り、高齢者・チャレンジド（障がい者）・子どもたちを始め、全ての住民が共に支え合い、やすらぎとふれあいのある心豊かな地域共生のまちづくりを目的に設立された。場所は高浜南部ふれあいプラザ（愛知県高浜市二池町一丁目 8 番地 5）である。

南部まち協は 2005 年から 15 年間もの間、まちづくりとしてさまざまな事業に取り組んできた。その内の一つ、子どもの健全育成に関する事業では①子どもの居場所づくり、②親向け講座、③子ども向け講座、④季節特別講座、⑤親子ふれあい講座、⑥ものづくり講座、⑦子どもの健全育成活動補助、⑧青少年の非行防止活動、⑨子どもの明るい未来を支援する活動と、九項目にわたる事業を行っている。すこやかサタディは一つ目の項目「子どもの居場所づくり事業」の一環であり、2016 年に開始された。この活動は南部まち協が長年にわたりまちづくりをしてきた実績から、子ども食堂を始めたいと提案してわずか三か月でトライアルに入ることができた（2016 年 11 月に提案し、2017 年 1 月にはトライアル）。その後、2 月と 3 月に二回ずつ研修を行い、正式に活動を始めたのは 2017 年 4 月である。

第 1 項　立ち上げの経緯

すこやかサタディの立ち上げの経緯について南部まち協は次のように述べている。

子どもにとっての貧困とは単にお金が無いというだけではなく、生きていくうえで必要な様々な知識を与えてくれる大人が身近にいない、豊かな感性をみがくために必要な機会を得られない、子どもは生まれてくる環境・親を自分で選べないといった要因も含まれます。最も恐れる貧困は、夢を見ることが出来ない生活になること。きれいごとなしに子どもにはお金と愛情が必要不可欠です。これが長い時間欠乏すると子どもに待っているのは孤独感、悲しさ、寂しさ、ついには耐え難い絶望感を持ち、やけっぱちな考えと行動、無気力、などにより非行へ進んで行く事が多い。自らの責任ではない貧困で、多くの子どもたちが、豊かな経験を積めなかったり、温かい人びとに囲まれた環境で育てなかったり、中には食事も十分に取れていなくて、学校での給食が一日で唯一の食事という子もいるというのです。子どもというのは学校と家庭の間のとても狭い世界で生きています。親がこの現状を隠すということで、子どもたちの現状は外からは気づかれにくくなっています。
「子どもの貧困対策法」が作られ、その具体的な対策を定めたものが 2014 年に示されました。具体的な政策としては教育の支援・生活の支援・保護者に対する就労の支援・経済的支援。法令があれば直ちに子どもの貧困が解消できるものではありません。子どもの身近なところで直接的な支援が一番大切であり効果も大きい。すなわち学校と地域を主とした支援体制がなければ一刻を待てない子ども達を救えないことになります。

中でも重要なものは食事です。子どもは腹一杯食べて、穏やかな心を保ち頭脳と共に健やかに成長していく原動力となます。子どもの貧困支援に対し地域として何が出来、何をすべきか考えますと、子どもへの食事支援が最も効果的で地域支援にふさわしいと考えます。

南部まちづくり協議会には子どもの健全育成事業と称する活動体があり、地域の子どもを対象に取り組んでいる実績があります。取り分けても事情はさておき、おなかを空かせた子どもには何かをしなければと考え、十分とは言えずとも二週間毎の夕食を引き受けたい。

以上の説明で南部まち協の理事全員の賛同を得て子ども食堂はスタートできました。名称の「すこやかサタディ」は露骨に食堂と言いたくないし、食事以外にも色々やる事もあることからこの名が付きました。土曜日にかかわり合う皆が元気よく集う、だから「すこやかサタディ」。また、支援活動の協力者として食材などの無料提供をいただける団体、お米の提供者、お菓子を出してくれる団体、そして調理を引き受けてくれる各団体など、すべての方々が質問の一つもなく協力してくれました。この様な流れですこやかサタディの活動が開始しました（特定非営利活動法人高浜南部まちづくり協議会　2017：1-2）。

南部まち協はステップのイベント活動や昼食支援に協力しているのだが、その活動の中で夕食の支援も必要があることに気づいた当時の地域福祉グループ職員高橋正と南部まち協子どもグループリーダー神谷義国が考案し、夕食支援を行う子ども食堂が開設された。元々、中学校校長と保護司であった二人には豊富な経験と実績があり、また、今まで構築してきた人脈の広さから多くの協力団体に調理担当のボランティアを要請した際、どの団体も快く引き受けてくれた。他にも、開催場所の確保や運営体制についての打ち合わせ等子ども食堂を立ち上げるうえで骨の折れる作業は多々あるが、すこやかサタディが提案から約半年で正式に活動を始められたのはこの両名によるところが大きい。その詳しい経緯や当時の想いは、後述の「子どもたちを支える大人の想い」の項目にて深掘りする。

以上が一章の冒頭にて述べた疑問、すこやかサタディの立ち上げの経緯である。また、生活困窮家庭に属する子どもがすこやかサタディに参加するようになった件については、先に始められた学習支援事業「ステップ」の生徒の中から希望者を募り、希望した生徒に対してすこやかサタディの参加を勧めたということになる。よって、生活困窮家庭に属する子どもをステップに誘う方法が問いの答えになろう。その答えは前述のとおり、学校の先生や子ども健全育成支援員との連携だ。子どもの様子をよく知る、家族以外の身近な第三者によって生活の苦しい子どもが支援を行う機関とつながる。貧困問題を解決するには自助・共助・公助の連携が必要だが、都市化している現代においては地域のつながりが薄れてしまっている。しかし、高浜市ではこの連携がうまく機能しており、生活困窮家庭に属する子どもに支援の手を伸ばすことができている。地域住民の助け合いの精神によって為せる業であろう。

このようにして現在 30 名あまりの生活困窮家庭に属する子どもが参加するすこやかサタディだが、実はその対象者は限定的なものではない。ステップから続けて参加する子の親や友達など誰でも参加可能だ。実際に、ステップでの学習支援は受けていないがすこやかサタディには遊びにくる子どもが数名いる。

第 2 項　これまでの活動内容

すこやかサタディの活動についての概要は、以下の通りだ（表 1）。

【表 1】すこやかサタディ概要

開催場所	地域共生型福祉施設あっぽ
日時	第二、第四土曜日の 16 時～19 時
対象者	高浜市在住児童とその親、その他地域の人々誰でも
料金	子ども無料、大人 300 円
調理スタッフ	地域の協力団体によるボランティア（9 団体）

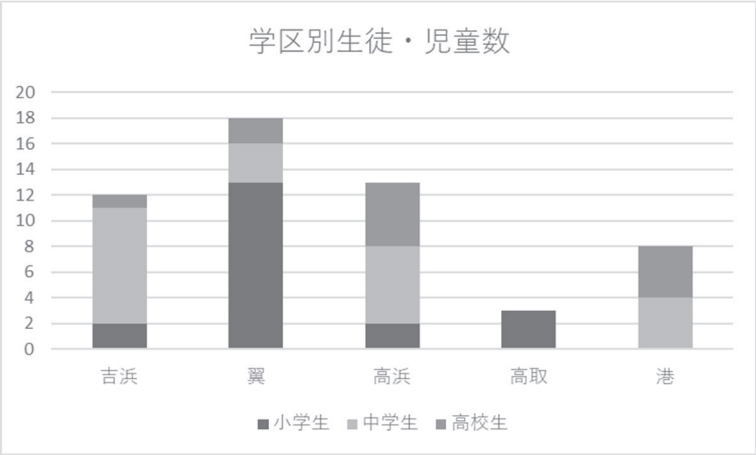
【図 3】高浜市小学校区別マップ（出典：高浜市ホームページ、色分け・星印：筆者）

ステップの開催場所であるいきいき広場の営業時間は 17 時までであり、夕食支援を行う施設として利用できなかった。そこで、別の候補として挙がった施設があっぽであり、①30 人程度食事ができるスペース、②衛生面、③調理できる場所の三点を満たしていたため、この場所で行われることとなった。しかし、ステップの行われるいきいき広場とあっぽとの間には 2.3 ㎞の距離があり、歩いて移動するには無理があった（図 3）。また、あっぽは最寄駅からも若干遠く、電車での移動も不便である。そのため、南部まち協のスタッフが車で子どもたちを送迎することでこの問題は解決した。日時は第二、第四土曜日の 16 時から 19 時であり、対象者は高浜市在住児童とその親、その他地域の人々と誰でも参加可能である。料金は子ども無料、大人 300 円にて食事が提供される。調理を担当するスタッフは、9 団体（高

浜市更生保護女性会、高浜市保護司会、田戸有志会、高浜の防災を考える市民の会、食育ボランティア、松井組、ほっこりクラブ、第 2 ふれあいプラザ、南部まち協子どもグループ）のボランティアである。これらの協力団体は南部まち協が長年にわたってまちづくりをしてきた中でできたつながりである。調理担当当番は南部まち協のスタッフが予定を組み、各協力団体がそれに合わせる形だ。食材については、米を JA あいち中央高浜支店（以下、JA 高浜）から、野菜や果物を JA あいち中央産直センター（以下、JA 高取）から、菓子をマリオン高浜店・お寺おやつクラブ・市内の一般市民からそれぞれ提供されている。提供される食材は各団体で売れ残ったものや余ったものであり、食品ロスにも貢献。また、毎回開催するごとに「こども食堂支援基金」から奨励金として 5,000 円が支給され、その資金で調味料やその他食材を購入している。

続いて、すこやかサタディに参加する子どもたちの様子について説明しよう。すこやかサタディの流れは、16 時にステップでの学習支援を終えた子どもたちを南部まち協のスタッフが車で送迎し、あっぽまで移動。その後、子どもたちはあっぽの地域交流スペースにて夕食支援を受ける。夕食が出来上がるのは 18 時頃。それまでの時間は自由時間となり、カラオケやダーツ、卓球、輪なげなどで遊びながら過ごす（図 4）。当初は仲良しグループが固定されており、カラオケや卓球などを独り占めするグループがいたがすこやかサタディの活動を続けていくうちに子どもたちが自主的に順番を決める等、自らルールを作り出し仲良く遊べるようになった。他にも態度や言葉遣いの改善、受付を年長の子どもが行うようになったなどさまざまな変化が見られた。

【図 4】カラオケで遊ぶ子どもたち
（2017 年 5 月 3 日撮影）



【図 5】2017 年度利用状況「学区別生徒・児童数」N=54

（出典：特定非営利活動法人南部まちづくり協議会「学習支援事業と地域との連携について」）

南部まち協が行った 2017 年度利用状況調査によると[17]、すこやかサタディに参加する子どもの学区別生徒・児童数は吉浜学区が 12 人、翼学区が 18 人、高取学区が 3 人、高浜学区が 13 人、港学区が 8 人であった（図 5）。高浜市の小学校区は図 3 にて色分けして示してある。図 5 から、すこやかサタディを利用する子どもは地域差が大きいことがわかる。小学生は翼学区の子の利用が多く、港学区の子の利用は無い。中学生は圧倒的に吉浜学区の子の利用が多い。高校生は高浜学区・港学区の子の利用が多い。高取学区に至っては、中高生の利用は無い。生徒数の上位三学区（翼・高浜・吉浜）は、ステップが行われるいきいき広場周辺の地区であり、生徒数の少ない港・高取学区は遠い地域である。すこやかサタディに参加する子どもたちは大半がステップ利用者で占められているため、このような地域差が出たと考えられる。

第 4 節　こども食堂支援基金について

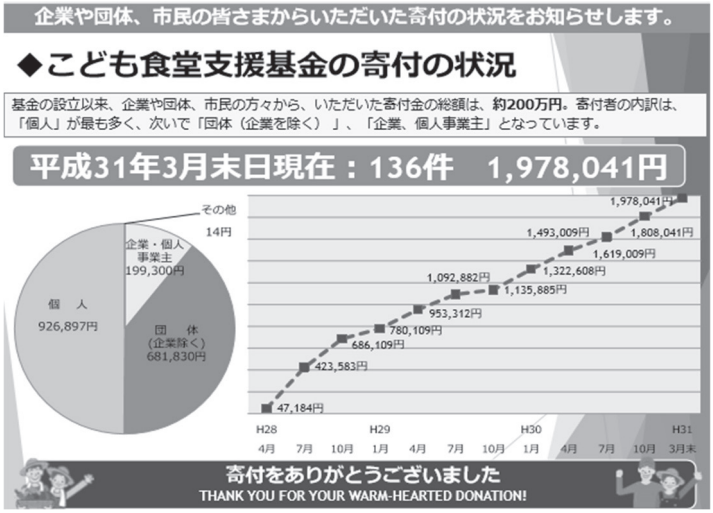
一章の最後にステップの昼食支援にも、すこやかサタディの夕食支援にも登場した、「こども食堂支援基金」について詳しく説明しよう。

こども食堂支援基金とは、たかはま子ども食堂支援推進協議会が設置した制度のことである。たかはま子ども食堂支援推進協議会は高浜市の将来を担う全ての子どもたちが、その生まれ育った環境によって左右されることなく健やかに成長していけるよう、高浜市民を中心に構成される地域の様々な団体やグループ等が生活困窮家庭やひとり親家庭の子どもたち、不登校など課題を抱えた子どもたちへ栄養バランスのとれた食事を安価で提供する活動（子ども食堂運営活動）を推進することを目的に、2016 年 4 月 1 日に設立された。そして、高浜市の子どもたちの「豊かな学び」と「健やかな成長」のため、こども食堂支援基金を設置したのである。この制度は、市内外の様々な協力団体および高浜市民からの寄付を募集するものであり、その寄付金はステップ及びすこやかサタディの支援に活用されている。寄付の方法は①現金手渡し、②銀行振り込みの二種類がある。まず、①現金手渡しはい

[17] 特定非営利活動法人高浜南部まちづくり協議会，2018，「学習支援事業と地域との連携について」5 項，学区別生徒・児童数.

きいき広場 2 階の福祉部地域福祉グループに直接持っていく方法と事務局あてに電話し、事務局委員が指定の場所まで足を運ぶ方法だ。②銀行振り込みについてはゆうちょ銀行からの振り込みとその他の金融機関からの振り込みがあり、それぞれの口座番号は市のホームページに記載されている。

これまでの寄付の状況は図 6・図 7 に示した通りであり、コロナ禍にも関わらず今年は合計 1,153,512 円もの寄付が集まった。

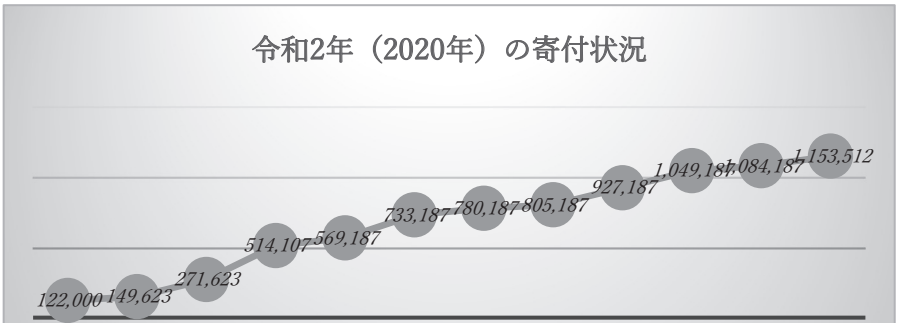


【図 6】平成 31 年（2019 年）3 月までの寄付状況（出典：高浜市ホームページ）

第二章　支援活動参加記録

第 1 節　ステップ＆ステップ・ジュニアの活動内容の変化

世界各地で新型コロナウイルス感染症が猛威を振るう今日、感染は拡大する一方で未だ終息の兆しが見えない。厚生労働省は 2020 年 12 月 11 日、英国アストラゼネカ株式会社が新型コロナウイルスのワクチン開発に成功した場合、来年度初頭からワクチンの供給を受けるとの契約を締結した[18]が、まだまだ先行きは不透明である。このような状況下において学習支援事業及び子ども食堂はどのように対応し、活動しているのか。第二章ではその内容



【図 7】令和 2 年（2020 年）の寄付状況

[18] 厚生労働省，2020，「新型コロナウイルスワクチンの供給に係るアストラゼネカ株式会社との契約締結について」
（https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_15422.html，2020 年 12 月 20 日にアクセス）.

の変化についてまとめ、実際に支援活動に参加した記録を行う。

ステップでは4月4日の開催以降、4月の第2週から5月の第5週まで活動を休止した。施設が使用不可能であったこの時期は、ZOOM によるオンライン面談を木曜日と土曜日に行っていた。活動が再開されたのはステップ・ジュニアが6月4日から、ステップが6月6日からである。

活動再開後からはコロナ対策として、①使用する部屋の人数制限と消毒、換気②入室時の体温チェックと手消毒③食事を二部制に分ける等、さまざまな対策を行っている。使用する部屋の人数制限についてはワーキングルーム（ジュニア使用）が上限15人、会議室Ｂ（ステップ使用）が上限22人、クッキングルームが上限31人となっている。部屋の使用人数を超えた場合、別室も利用可能であり、座席はひとテーブル1人が原則。グループ活動も原則行わない。また、机の消毒については使用前にスタッフが、使用後に生徒がふき取りを行っており、換気は入口と窓を常に開け放している。

昼食は前半11時30分・後半12時30分と時間を分け、二部制に。部屋の密状態を防ぎ、ひとテーブル3人制で対面を避けての食事を行っている。食事中の会話は禁止で、食事が終わり次第すぐにマスクを着用する。また、食事の配膳については大皿料理や鍋料理はなるべく避け、ボランティア側が配布する形となった。

第2節　すこやかサタディの活動内容の変化

すこやかサタディでは新型コロナウイルス感染拡大の状況を受け、一時活動を休止した。休止したのは3月14日・3月28日・4月11日の三回であり、4月25日から活動を弁当の配布に切り替え再開した。高浜南部ふれあいプラザにて弁当を作り、あらかじめ注文のあった子どもたちの各家庭まで配達。弁当配布の対象者は、ステップ及びステップ・ジュニアに通う児童生徒とその兄弟姉妹に限ったものである。6月27日以降はステップが活動再開したことにより、いきいき広場へと届けられるようになった。配達は南部まち協の所有する車で行っている。弁当を作る際には常に窓を開け、換気扇を回し、空気が滞ることの無いよう気を付けている。また、調理を行う人は必ず手袋をはめ、衛生面にも注意を払っている。弁当を詰めるビニール袋には中敷きを入れ、弁当が傾かないよう工夫が為されていた。この中敷きはボランティアスタッフのアイデアであり、毎回同スタッフが手作業で厚紙を切り取って作っている。

第3節　支援活動参加記録

第1項　ステップ食事支援参加記録

⑴7月23日（木）

メニュー：ごはん、豚汁、そうめんのミートソースがけ、プチトマト、スイカ、ダルゴナコーヒー

参加人数：生徒15人
　　スタッフ7人

寄付食材：米（JA高浜）、スイカ（市民）

その他記述

南部まち協のステップ昼食支援メニューは豚汁が定番だ。今回は少しおしゃれなメニュ

ーを加えてみたいとの事で、インスタグラムで流行っていた[19]ダルゴナコーヒーを提案した。ダルゴナコーヒーとはインスタントコーヒーと砂糖、お湯を同じ比率で泡立ててホイップ状にし、それを牛乳の上に乗せて作られる飲料である。見た目のおしゃれさは喜ばれたが、子どもたちには少し苦かったようだ。

⑵8 月 6 日（木）

メニュー：ラーメン、キムチチャーハン、クリームソーダ

参加人数：生徒 18 人

スタッフ 7 人

寄付食材：米（JA 高浜）、ラーメン（お寺おやつクラブ）

その他記述

前回の反省を活かし、今回のデザートは甘いアイスをトッピングするクリームソーダにした。飲み物はかき氷シロップをサイダーで割ったもの。その上にバニラアイスとさくらんぼをトッピング。

⑶8 月 20 日（木）

メニュー：キムチチャーハン、わかめスープ、かき氷

参加人数：生徒 19 人

スタッフ 7 人

寄付食材：米（JA 高浜）

その他記述

コロナの影響で祭りの開催が無いため、今年の夏はかき氷を食べる機会が少ないだろうと思い、デザートとして提供した。かき氷機は港小キッズクラブから借りた（図 8）。かき氷は子どもたちに好評でおかわりする子もいた。

【図 8】港小キッズクラブから借りたかき氷機。一緒に映るのは南部まち協事務局長福島さん。

⑷8 月 27 日（木）

メニュー：防災食アレンジチャーハン、わかめスープ、ポテト、フルーチェ、レインボーわらび餅

参加人数：生徒 17 人

スタッフ 7 人

寄付食材：防災食五目ごはん・防災食クラッカー（高浜市役所）

その他記述

期限の近い防災食を市役所から頂いた。お湯を入れふやかして食べる五目御飯に少しアレンジを加えチャーハンに。クラッカーは砕いてフルーチェの下に敷いた。レインボーわらび餅は餅をかき氷シロップに漬け、着色。

---

[19] コロナ禍の中，外出自粛の要請が為され家に籠ることが多くなったことから，家で簡単なアレンジレシピを作ることが流行した．コーヒーの名の由来は韓国の焼き菓子「ダルゴナ」に味や外観が似ていること．

⑸12 月 26 日（土）
メニュー：ごはん、豚汁、ポテト、パンケーキ
参加人数：生徒 18 人
スタッフ 24 人
寄付食材：米（JA 高浜）
その他記述
チャレンジサポーターの出席率が高かったらしく、スタッフの数が通常の 3 倍ほどに。パンケーキには賞味期限の切れそうな保存食のパンを使用。半分にカットし、生クリームと粉砂糖をトッピングすることでデザートにアレンジした。

第 2 項　すこやかサタディ参加記録

⑴5 月 9 日（土）
メニュー：おにぎり、鶏のから揚げ、里芋とイカの煮物、
えんどうのサラダ～ゆで卵添え～、甘夏ミカン、お菓子の袋詰め
調理担当：南部まち協事務局
弁当個数：26 個
配布家庭数：9 件
寄付食材：米（JA 高浜）、里芋と甘夏ミカン（JA 高取）、お菓子（マリオン高浜店・お寺おやつクラブ）
その他記述
米は一升八合炊き、約 60 個のおにぎりを作った。調理担当は本来ならば松井組が行う予定だったが、新型コロナウイルス感染拡大を危惧し、南部まち協の事務員が担当した。また、コロナ禍による長期休みに備えてレトルト食品三点（ビーフカレー・中華丼・おいしいごはん）とお茶をこども食堂支援基金で購入し、配布した。

⑵5 月 23 日（土）
メニュー：豚の生姜焼き、玉ねぎとじゃがいもとにんじんのカレー炒め、春雨サラダ、おにぎり、お菓子の袋詰め
調理担当：ほっこりクラブ
弁当個数：28 個
配布家庭数：9 件
寄付食材：米（JA 高浜）、玉ねぎ・じゃがいも・にんじん（JA 高取）、お菓子（マリオン高浜店・お寺おやつクラブ）

⑶6 月 27 日（土）
メニュー：おにぎり二個、コロッケ、小松菜の胡麻和え、マカロニサラダ、
きゅうり in ちくわ、プチトマト、とうもろこし、三色団子、お菓子の袋詰め
調理担当：第二ふれあいプラザ管理人とのりのりフットワーク
弁当個数：29 個

配布家庭数：1 件
寄付食材：米（JA 高浜）、とうもろこし（碧南副市長）、じゃがいも・玉ねぎ・さつまいも（水野理事長ご友人）、お菓子（マリオン高浜店・お寺おやつクラブ）

その他記述

のりのりフットワークとは高浜南部ふれあいプラザ 1 階にある「カフェ＆ベーカリーふるふる」で働くチャレンジド（障がい者）の保護者で構成された特定非営利活動法人である。のりのりフットワークは南部まち協の構成団体であるが、事情により確実に支援に参加できるとは限らないためすこやかサタディの協力団体には含まれていない。南部まち協子どもグループ、又は第二ふれあいプラザ管理人が調理担当を務める際に声をかけ、参加可能な日に協力している。この対応は当団体の希望によるもの。

⑷7 月 11 日（土）
メニュー：タコライス、寒天ゼリー、お菓子の袋詰め
調理担当：高浜市保護司会
弁当個数：30 個
配布家庭数：1 件
寄付食材：米（JA 高浜）、きゅうり（JA 高取）、お菓子（マリオン高浜店・お寺おやつクラブ）

⑸7 月 25 日（土）
メニュー：おにぎり、チキンカツ、かぼちゃのサラダ、じゃがいもとたらこの煮物、小松菜のおひたし、ピーマンのソテー、お菓子の袋詰め
調理担当：第二ふれあいプラザ管理人
弁当個数：29 個
配布家庭数：1 件
寄付食材：米（JA 高浜）、お菓子（マリオン高浜店・お寺おやつクラブ）

その他記述

米は二升炊き、おにぎりを 67 個作った。

⑹8 月 22 日（土）
メニュー：おいなりさん、細巻き三種、切り干し大根の煮物、プチゼリー、お菓子の袋詰め
調理担当：南部まち協子どもグループ
弁当個数：28 個
配布家庭数：1 件
寄付食材：米（JA 高浜）、お菓子（マリオン高浜店・お寺おやつクラブ）

⑺9 月 12 日（土）
メニュー：とりめし、ミートボール、ウインナー、マカロニサラダ、なすの塩漬け、梨、プチゼリー、焼き菓子、お菓子の袋詰め

調理担当：更生保護女性会
弁当個数：30 個
配布家庭数：1 件
寄付食材：米（JA 高浜）、ナス（JA 高取）、焼き菓子（更生保護女性会）、お菓子（マリオン高浜店・お寺おやつクラブ）

⑻9 月 26 日（土）
メニュー：おにぎらず、野菜の天ぷら、冬瓜の煮物、プチゼリー、お菓子の袋詰め
調理担当：ほっこりクラブ
弁当個数：30 個
配布家庭数：1 件
寄付食材：米（JA 高浜）、さつまいも・冬瓜・かぼちゃ（JA 高取）、お菓子（マリオン高浜店・お寺おやつクラブ）
その他記述
おにぎらずとは、その名の通り「握らないおにぎり」である。見た目はサンドイッチのようで、平たく乗せたごはんと具材を海苔で包む。この日のおにぎらずの中身はレタス・マヨネーズ・鶏肉のピカタ、ケチャップ。

⑼10 月 10 日（土）
メニュー：チキンカツ、里芋の煮物、なすとピーマンのみそ炒め、さつまいもの蜂蜜和え、チンゲン菜のおひたし
調理担当：田戸有志会
弁当個数：35 個
配布家庭数：11 件
寄付食材：米（JA 高浜）、里芋・チンゲン菜・なす・ピーマン（JA 高取）、お菓子（マリオン高浜店・お寺おやつクラブ）
その他記述
台風の影響でステップは中止に。そのため、弁当は各家庭に配達することになった。

⑽10 月 24 日（土）
メニュー：とりめし、マカロニサラダ、肉団子、ウインナー、オレンジ、プチゼリー、お菓子の袋詰め
調理担当：更生保護女性会
弁当個数：35 個
配布家庭数：1 件
寄付食材：米（JA 高浜）、ミカン（JA 高取）、チョコのお菓子（更生保護女性会）、お菓子（マリオン高浜店・お寺おやつクラブ）
その他記述
更生保護女性会からチョコ菓子の差し入れがあった。この日のお菓子の袋詰めは 1 人につき二袋となった。

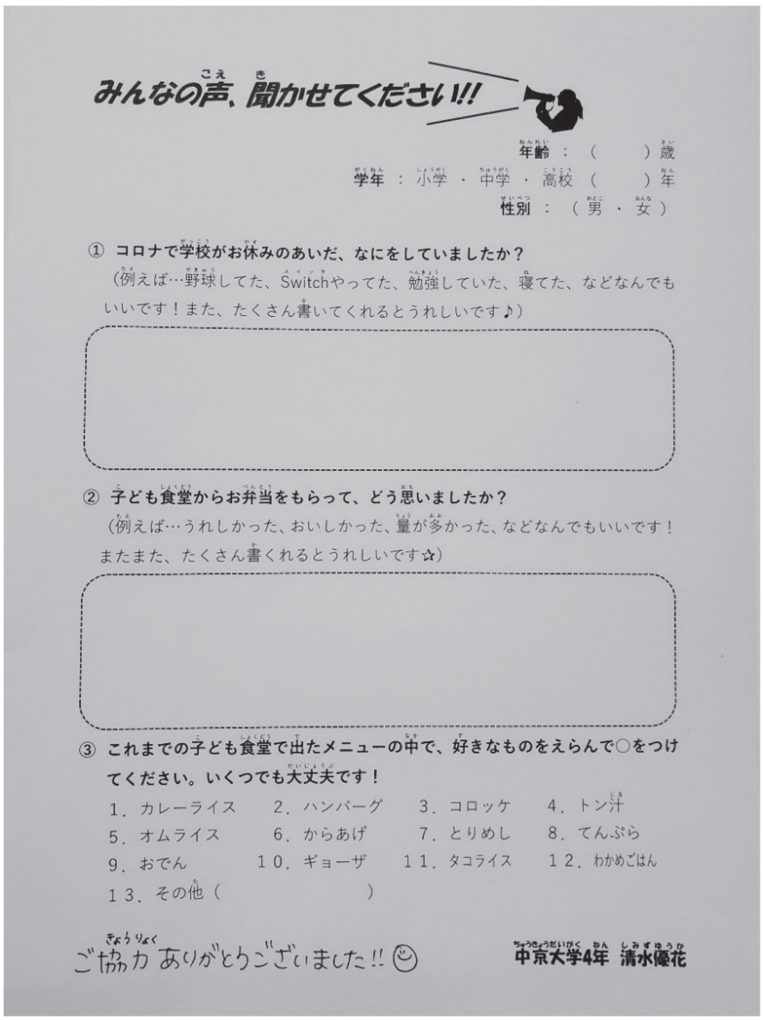
⑾11 月 14 日（土）
　メニュー：さつまいもごはん、かき揚げ、煮っころがし、白菜の甘酢和え、ウインナー、みかん、お菓子の袋詰め
　調理担当：松井組
　弁当個数：31 個
　配布家庭数：1 件
　寄付食材：米（市民）、さつまいも・にんじん・白菜・大根・ミカン（JA 高取）、お菓子（マリオン高浜店・お寺おやつクラブ）

⑿11 月 28 日（土）
　メニュー：とりめし、おでん、ウインナー、りんご、バナナ、ゼリー、ぱりんこ、お菓子の袋詰め
　調理担当：更生保護女性会
　弁当個数：29 個
　配布家庭数：1 件
　寄付食材：米（JA 高浜）、大根・リンゴ（JA 高取）、ぱりんこ（更生保護女性会）、お菓子（マリオン高浜店・お寺おやつクラブ）

⒀12 月 12 日（土）
　メニュー：ハンバーグ、ポテト、野菜の煮物、リンゴと白菜とたまごのサラダ、みかん、お菓子の袋詰め
　調理担当：南部まち協子どもグループ
　弁当個数：32 個
　配布家庭数：1 件
　寄付食材：米（JA 高浜）、白菜・大根・リンゴ・ミカン（JA 高取）、お菓子（マリオン高浜店・お寺おやつクラブ）

⒁12 月 26 日（土）
　メニュー：おいなりさん、肉じゃが、だし巻き玉子、ケチャップウインナー、リンゴとツナのサラダ、きゅうりの漬物、ケーキ、みかん
　調理担当：第二ふれあいプラザ管理人とのりのりフットワーク
弁当個数：31 個
　配布家庭数：1 件
　寄付食材：米（JA 高浜）、リンゴ・みかん・トマト・じゃがいも・エリンギ（JA 高取）、ケーキ（市民）、お菓子（マリオン高浜店・お寺おやつクラブ、市民）
　その他記述
　個包装になっているセブンイレブンのミルクレープを 29 個、市民が寄付してくれた。申し込み期限を過ぎてから 2 人追加となったので、この 2 人の分は別の種類のケーキを買った（セブンイレブンに同じものを買いに行ったが、在庫が無く、チョコレートケーキになった）。また、別の方からチップスターとコアラのマーチの寄付もあり、クリスマスらしい豪華なメニューになった。

第三章　アンケート調査、インタビュー調査
第１節　すこやかサタディを利用する子どもたちの声



みんなの声、聞かせてください!!

年齢：（　　）歳
学年：小学・中学・高校（　　）年
性別：（男・女）

① コロナで学校がお休みのあいだ、なにをしていましたか？
（例えば…野球してた、Switchやってた、勉強していた、寝てた、などなんでもいいです！また、たくさん書いてくれるとうれしいです♪）

② 子ども食堂からお弁当をもらって、どう思いましたか？
（例えば…うれしかった、おいしかった、量が多かった、などなんでもいいです！またまた、たくさん書くれるとうれしいです☆）

③ これまでの子ども食堂で出たメニューの中で、好きなものをえらんで○をつけてください。いくつでも大丈夫です！

1．カレーライス　2．ハンバーグ　3．コロッケ　4．トン汁
5．オムライス　6．からあげ　7．とりめし　8．てんぷら
9．おでん　10．ギョーザ　11．タコライス　12．わかめごはん
13．その他（　　）

ご協力ありがとうございました!!

中京大学4年　清水優花

【図 9】子どもたちに行ったアンケート票

現在のすこやかサタディでは子どもたちが弁当を食べる様子を直接確認することが出来ず、どのように感じているかがわからない。そこで、筆者の作成したアンケート（図 9）にて子どもたちの想いを聞き出す。また、新型コロナウイルス感染症の影響で学校が休校になるなど、思うように過ごせなかっただろう子どもたちの声も調査する。

質問内容は、①コロナで学校がお休みのあいだ、なにをしていましたか？②子ども食堂からお弁当をもらって、どう思いましたか？③これまで子ども食堂に出たメニューの中で、好きなものをえらんで〇をつけてくださいの三点。質問①・②は自由記述であり、質問③には選択肢を設けた（複数回答）。

調査対象はステップ及びステップ・ジュニアに通う、すこやかサタディ利用者の子どもだ。ステップ・ジュニアの対象年齢は小学 4 年生からであるため、それ以上の年齢の子どもがアンケートに協力してくれた。合計 13 人である。

分析方法について、質問①・②は計量テキスト分析「KH Coder」を用いる。KH Coder と

は、テキスト型データの計量的な内容分析（計量テキスト分析）もしくはテキストマイニングのためのフリーソフトウェアである。各種の検索を行えるほか、どんな言葉が多く出現していたのか、その頻出度を見ることができる。質問③では単純集計を行い、子どもたちに人気なメニューを明らかにする。

第１項　コロナ禍での子どもたちの過ごし方

【表 2】質問①アンケート結果

学年	回答
高校 3 年	寝てた、勉強、読書
小学 5 年	ゲームをしていた（3DS）どうぶつの森が好き
高校 2 年	バイト
小学 5 年	テレビ見てる
小学 5 年	スイッチ（あつ森）（ニンジャラ）アイポット
中学 1 年	ゲーム
中学 2 年	色々やってた。自主勉、ゲーム（太鼓の達人）
高校 2 年	島作ってた、寝てた
中学 1 年	DS、テレビ
中学 1 年	スマホをいじっていた。家の手伝いをしていた。ゴロゴロしていた。
中学 1 年	寝てた
高校 1 年	ゲーム、勉強、昼寝
高校 3 年	でんわ、うんどう

【表 3】質問①回答抽出語リスト

	語	頻度		語	頻度		語	頻度
1	ゲーム	4	11	スイッチ	1	21	色々	1
2	寝る	3	12	スマホ	1	22	太鼓の達人	1
3	DS	2	13	ニンジャラ	1	23	昼寝	1
4	テレビ	2	14	バイト	1	24	島	1
5	勉強	2	15	家	1	25	読書	1
6	あつ森	1	16	見る	1	26	でんわ	1
7	どうぶつの森	1	17	好き	1			
8	うんどう	1	18	作る	1			
9	アイポット	1	19	自主勉	1			
10	ゴロゴロ	1	20	手伝い	1			

質問①のアンケート結果は総抽出語数 88 語、異なり語数 41 語であった。総抽出語数とは分析対象ファイルに含まれるすべての語の数のことであり、異なり語数とはテキストの中で同一の単語が何度用いられても、これを一語とし、全体で異なる単語がいくつあるか数えた数のことである。また、助詞・助動詞などを除いた分析に使用される語として総抽出語数 39 語、異なり語数 29 語が抽出された。さらに、16 の文があり、段落は 13 あった。これらの抽出単語のリストは表 3 にて示す。

表 3 を見ると、ゲームをして過ごした子どもが最も多いことがわかる。「DS」「スイッチ」はゲーム機器を表す語であり、「あつ森」「どうぶつの森」「ニンジャラ」「太鼓の達人」は全てゲームソフトを表す語である。また、「作る」と「島」は回答の「島作ってた」という文から抽出された語であると考えられる。これはどうぶつの森の島を作っていたという意であると予測し、ゲームをしていたと捉える。よって、ゲームをして時間を過ごしたと思われる語が最も多くなっている。次いで多かったのは「寝る」であり（「昼寝」「ゴロゴロ」の語も含む）、その次に多かったのは「勉強」だ（「自主勉」の語も含む）。

第 2 項　弁当について

【表 4】質問②アンケート結果

学年	回答
高校 3 年	おいしかった、ちょうどいい量だった
小学 5 年	量が少し多いけれど、お肉はすきです
高校 2 年	うれしかった
小学 5 年	ありがたくおもう
小学 5 年	おいしかった。またつくってください
中学 1 年	うれしかった、おいしかった
中学 2 年	とてもおいしかった。お腹いっぱい食べられた。
高校 2 年	おいしかった
中学 1 年	うれしい
中学 1 年	昼ごはんと同じでとってもおいしいです。量も多くて満腹になれます。
中学 1 年	うれしかったし、おいしかった
高校 1 年	おいしかったです
高校 3 年	おいしかった。

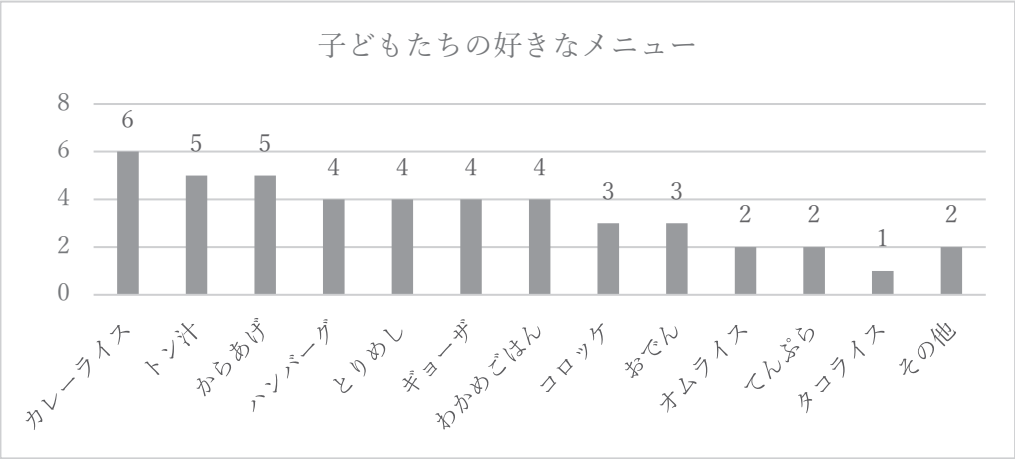
【表 5】質問②回答抽出語リスト

	語	頻度		語	頻度
1	美味しい	9	7	作る	1
2	嬉しい	4	8	少し	1
3	量	3	9	食べる	1
4	多い	2	10	昼	1
5	お腹	1	11	肉	1
6	すき	1	12	満腹	1

質問②のアンケート結果は総抽出語数 79 語、異なり語数 41 語であった。また、助詞・助動詞などを除いた分析に使用される語として総抽出語数 36 語、異なり語数 22 語が抽出された。さらに、16 の文があり、段落は 13 あった。これらの抽出単語のリストは表 5 にて示す。正しい結果を出すためアンケートに記入された文章を漢字に変換し、単語の抽出を行った。

最も多い単語は「美味しい」の語であり、9 回使用されていた。次いで多かった単語は「嬉しい」の語で 4 回の使用であった。「量」は 3 回の使用で表 4 の回答を見ると、「ちょうどいい量」「量が少し多い」「量が多くて満腹」と記述されていた。また、「ありがたくおもう」や「お腹いっぱい食べられた」など回答にはポジティブな意見ばかりであった。これらのことから、弁当は子どもたちに好評であることがわかった。

第 3 項　人気なメニューは何か



【図 10】子どもの好きなメニューグラフ（複数回答）

質問③では過去、実際にすこやかサタディで提供されたメニューの中から⑴カレーライス⑵ハンバーグ⑶コロッケ⑷トン汁⑸オムライス⑹からあげ⑺とりめし⑻てんぷら⑼おでん⑽ギョーザ⑾タコライス⑿わかめごはん⒀その他の十三項目に絞り、調査を行った。尚、回答は複数回答である。

結果、一番人気がカレーライスであり、二番がトン汁・からあげ、三番がハンバーグ・とりめし・ギョーザ・わかめごはんであった。また、その他の項目にはポテト、麻婆豆腐との記述があった。

第 2 節　子どもたちを支える大人の想い

一章にて子ども食堂及び学習支援事業の立ち上げの経緯や目的について、資料をもとに記述した。ここでは、その支援を行う当事者 4 名にインタビューを行い、子どもたちを支える大人の想いを深掘りする。インタビュー調査にご協力いただいたのはすこやかサタディ代表・神谷と南部まち協理事長・水野輝久、スクールソーシャルワーカー・高橋、地域福祉グループ子ども健全育成支援員・箕浦博夫である。4 名のインタビューを行った時点での属性は次の通りである。

【表 6】4 名の属性

名前	年齢	職業
神谷義国	79 歳	高浜南部まちづくり協議会子どもグループリーダー・新事業企画グループリーダー
水野輝久	72 歳	高浜南部まちづくり協議会理事長
高橋正	65 歳	スクールソーシャルワーカー
箕浦博夫	61 歳	地域福祉グループ子ども健全育成支援員

インタビューの日にちや場所については、神谷・水野は 12 月 12 日（土）に高浜南部ふれあいプラザにて、高橋は 12 月 16 日（水）にいきいき広場にて、箕浦は 12 月 26 日（土）にいきいき広場にて、それぞれ行った。尚、調査方法は質的調査の半構造化インタビューである。

第 1 項　インタビューその①

インタビューその①ではすこやかサタディの代表者である神谷に行ったインタビュー内容を記録する。質問は「Q1.子ども食堂を始めた理由」「Q2.すこやかサタディが立ち上がるまでの流れ」「Q3.子ども食堂の活動を弁当に切り替えた理由は何か」の三点について伺った。内容は以下に記す。

Q1.子ども食堂を始めた理由

高浜市が中高生を対象とする学習支援事業を立ち上げる際、南部まち協は工作や屋外学習などのイベント活動の手伝いを頼まれた。また、土曜日開催であるため昼間の食事が必要ということで食事支援も頼まれた。これらの依頼を引き受け、支援活動を続けている最中に新たに小学生を対象とするスタッフ・ジュニアが立ち上がったのだが、このとき露骨に貧困の有様が見えてしまった。何が見えたかというと、中学生以上の子は先輩から教科書やノートなどを貰うということを知っているが、小学生の子はその事を知らず、教科書等の用意ができていなかったこと。もちろん人によって貧困度合いにはバラつきがあるが、ひどいところでは無い物なら欲しいと万引きや人から盗むなど、さまざまな非行に走ってしまっていた。そこで、この貧困からくる問題をどうにかしたいと当時の高橋校長が保護司をしていた私のところに相談に来た。困っているのなら私が面倒を見ようということで子ども食堂を始めた。

私が幼い頃は、「貧困という字は貧しくて困ると書く。何が貧しいのかというとそれは心である。なぜ困っている人がいるのに自分だけ食べているのか。余っているものがあるのなら分けてあげればいい。困ったときはお互い様なのだから助け合って生きなさい。」と教育を受けた。当時は戦後間もない頃で生きるか死ぬかという時代だった。その時代を知っているため、このような支援活動を行うことはなにも苦ではない。人は、何故このような面倒を引き受けるのかと言うが、私たちは辛い経験をしてきた過去がある。貧しい子をこのまま放っておくと立派な犯罪者になってしまう。欲しいものがあれば人から奪う人に育ってしまう。そこで、食べるものくらいはみんなで助けようということで子どもの支援に手を挙げた。子どもは親や国を自分で選べない。そのため、子どもの困りごとは無条件で大人が助けると良いと思う。出来ることをやれる範囲で支援しようと考えている。

Q2.すこやかサタディが立ち上がるまでの流れ

生活困窮家庭のエンゲル係数[20]を見て、資金のほとんど食費に充てていること気づき、みんなに協力してもらいながら立ち上げた。やはり衣食住の中でも“食”というのは生きていく上で欠かせない物であるからだ。

立ち上げの準備の際、高取の農協へ子どもを支援してやりたい旨を伝え、余った食材の無償提供をお願いしたところ、快く承諾してくれた。「なぜ私が手伝わなくてはならないのか」などという質問はゼロ。農協の組合長に米の提供をお願いした時も、マリオン高浜店に余ったお菓子の提供をお願いした時も同じであった。また、調理ボランティアとして力を貸してほしいと声をかけた全ての団体からも反対の意見は出なかった。このとき、高浜は良い人ばかりだと思った。

それから、準備は子ども食堂を開催する場所の確保に移った。刈谷の保健所に子ども食堂を行える場所の条件を聞きに行った。はじめは公民館でやろうかと考えていたが、これでは条件をクリアできなかった。そこで、別の件でお手伝いをしていた施設「あっぽ」の名前が挙がり、保健所の職員にチェックしてもらったところ、営業の許可がおりた。あっぽの責任者も利用を快く許可してくれたため、場所・人・もの（食材）の準備が整った。その後、トライアルを行い、2 ヵ月研修し、無事開設することが出来た。このように順調な流れで開催できたのは、南部まち協の今までの活動があったからこそだと思っている。

また、カラオケやダーツなどの遊具の準備をし、娯楽を作った。食事ができるまでの間はそれで遊んだり、会話をするなどして楽しく過ごせる環境づくりをしている。

Q3.子ども食堂の活動を弁当に切り替えた理由は何か

地域福祉部からコロナ禍により大人数での食事は出来なくなってしまったため、その間、子ども食堂は休むかどうするかと聞かれた。しかし、他のことは譲ってもいいが、食事支援は手を切ってはいけない。自分が子どもグループのリーダーであるうちは子どもに対する支援は絶対に引かないと答えた。しかし、子ども食堂を行う施設も利用不可となったため、弁当の配布という形で活動を再開させた。

そして、ステップに通う生徒の中のすこやかサタディ利用者に申込書を配り、必用な弁当の個数と住所を聞いた。中には、家に帰れば腹を空かせた弟や妹がいる子もいる。ステップに通う子のみに弁当を与えていては子どもの支援とは言えないだろう。そのため、兄弟・姉妹の分を含め、家庭にいる子ども全てを弁当配布の対象者とし、支援している。

第 2 項　インタビューその②

次に、インタビューその②では南部まち協理事長であり、田戸有志会・第 2 ふれあいプラザ管理人・南部まち協子どもグループの 3 団体の一員として調理担当ボランティアを行っている水野のインタビュー内容を記録する。伺った質問は「Q1.なぜ子ども食堂ボランティアに参加しているのか」「Q2.都市化している現代において、第三者である“地域の人”が生

[20] 一世帯ごとの家計の消費支出に占める飲食費の割合のこと．この数値が高いほど生活水準が低い傾向にある．

活困窮家庭に属する子どもに対する支援としてどこまで介入できるのか、その線引きの難しさについてどう考えるか」「Q3.コロナの時代に対応して活動を弁当配布に切り替えたが、この現状をどう思っているか」の三点。インタビュー内容は以下に記す。

Q1.子ども食堂ボランティアに参加している理由

2008 年 6 月 15 日にフィリピンへ行った。目的は、当時勤めていた会社の製品を検査するフィリピン人従業員宅への家庭訪問。その際に見たのが裕福な家庭と貧乏な家庭の差だった。貧乏な家庭の子どもは昼の間、学校に通わず、日本から輸出される医療廃棄物の中からお金になるものを一生懸命集め、それを売ることで生計を立てていた。このような場面を何度か見て、フィリピンの子どもたちのお手伝いをしようと思い至った。

家庭訪問に行くと、そこには家とは呼べないような、ブルーシートが張ってあるだけの家に暮らす家族がいた。また、フィリピンには日本人男性と現地女性との間に生まれた子どもがずいぶんいたが、そのことを男性に伝えると男性は女性のもとへやって来なくなった。逃げた相手の国籍がわからないと、生まれた子どもはフィリピン国籍を取得できなくなる。国籍が無いと学校に通えず、また、学校教育を受けていないと正規の会社などは全く雇ってくれない。国籍を持たない子が就けた職は、一日中働いて得られる給与が 800 円といった所であった。その職場にバスで通うには 160 円の交通費がかかるとのこと。子どもはその費用がもったいないから三時間かけて歩いて通っているのだと言った。

フィリピンでお世話になった人たちは日本語教室を開いていた。その教室に行くと 120 円程するパンが一つ、無償で貰える。子どもたちはそれが欲しくてやってくるのだ。また、日本語が出来るようになると雇ってくれる会社が増える。そのため、国籍を持たない子どもたちが多く通っていた。私もその教室に訪れる際には甘いお菓子などをたくさん差し入れた。子どもたちはとても喜んでくれた。それが嬉しくて行っていたところもある。あまりにも多くのお土産を持って行った時には商業目的と疑われ、税関で止められたが、たまたま同じ飛行機に乗っていたある市の市長さんがサポートしてくれた。

このような活動を 2008 年から 2016 年までの八年間、続けていた。他にも、看護師や介護士を育成する学校の先生達に何度も会うなどしていたが、今になって思い返すとあまり手伝ってやれなかったと感じる。日本に帰り、南部まち協の仕事をやるようになって初めて日本にも生活の苦しい子どもがいることを知った。フィリピンの貧困と日本の貧困では形が異なるが、自分の身近なところにも助けを必要としている子がいる。ならば、まずこの子どもたちを手助けする方が先だと思ったことがきっかけ。そこで、義国さんが子ども給食（子ども食堂）を始めるとの話を聞き、ぜひ手伝いたいと友達の奥さんたちに一つのグループを作ってもらい、食事支援するようになった。フィリピンの子どもたちに対して思うように手助けできなかった悔しさがあるから、今も尚、このような活動を続けている。

Q2.第三者である“地域の人”が子ども支援として、どこまで介入できると考えるか

かなり難しい、いつまでも残る話だろう。何を意識すべきかというと、それは「相手の気持ち」だと思う。逆の立場になって、自分たちが何かをやってもらうという時に「自分だったらどこまで容認できるのか」「どこまで行くと踏み込み過ぎだと感じるのか」と考えることが大切。人から言われて嫌だなと感じる、その手前でやめるべき。常に相手の気持ちを思

いやり、また、自分に置き換えて考えることで過剰な支援は避けられ、子どもたちの尊厳を守ることができると思う。

そして、子どもたちやその親など、何らかの支援を受けた人々にはいずれ「そういえばあの時、私たちこうしてもらったな」と思ってくれるといいと思う。その気持ちを次へと繋ぎ、今度は私たちが手助けしようと思ってほしい。例えば、紀伊大島の沖にトルコの船が座礁したとき、日本人はその船員たちを救助した[21]。このとき、台風の影響で出漁できず、食料の蓄えが少なかったにも関わらず、住民総出で救助にあたった。そしてトルコまで送ったのだが、トルコはこれを未だに感謝し、日本で何かあると支援の手を差し伸べてくれる。このように、時間が経ってから関係が生まれることもある。長期的な支援が必要であり、すぐに答えを求めてはいけないと思っている。

Q3.コロナ対策として活動を弁当配布に切り替えた現状をどう思っているか

今の状況では一番適切な支援の形だと思う。弁当を作り、盛り付け、配布するにはたくさんの人の協力が必要。また、予算 5,000 円の範疇で弁当を詰めるパックの用意や献立を考える必要があるため、簡単な事ではないが、そんな中でのこの支援方法を選んでいるのが南部まち協のいいところだと思う。ただし、今までの子ども給食（子ども食堂）であったらカレーやおでん等、温かい食べ物を提供できるが、弁当ではそうはいかない。それが寂しく感じる。やはり、これからの冬の時期はお弁当を受け取って家で広げる時には、かなり冷たくなってしまう。電子レンジで温めたらいいとも思うが、出来立ての温かい食事を出してやれないことが悔やまれる。

第 3 項　インタビューその③

続いて、インタビューその③では高橋のインタビュー内容を記録する。伺った質問は「Q1.なぜ学習支援事業を立ち上げたのか」「Q2.学習支援に通う子どもたちに対して思うこと」の二点。インタビュー内容は以下に記す。

Q1.なぜ学習支援事業を立ち上げたのか

生活困窮者自立支援法が制定され、それに基づいて各市町で生活困窮者の自立のための施策を打つこととなった。高浜市の施策はいくつかあるが、その内の一つが子どもの学習支援。生活困窮家庭にいる子どもが大人になったときにまた生活困窮家庭に陥らないように、貧困の連鎖を食い止めるため始まった。この学習支援を開設するにあたって、2018 年度、私が学校関係者として事務局に入ってきた。まだ学校に勤務していた時、夏休みや冬休みに食事をろくに取らない家庭が結構あった。学習支援は夏休みに入ってからのスタートであり、また、一日中行うということでどうしても昼ご飯が必要だった。昼ご飯は子どもによってはコンビニ弁当であったり、昼ご飯を作ってもらえないから家に帰って作ってまた来るという不都合が起こってしまう。そのため、学習支援を行うと同時に食事も提供すべきだと言ったが、では誰が提供するのかという話になった。そこで昼食支援を引き受けてくれる団体を私が探すこととなった。そんな中で南部まち協の名が上がり、南部まち協の義国さんは

[21] エルトゥールル号遭難事件のこと.

「他の協力者が見つからなければ、全部私たちがやってもいい」と声をかけてくれた。このような保証付きで、会議や打ち合わせを何度も行いながら協力団体を探していき、スタート時こそ少なかったが、今では多くのボランティア団体が協力してくれている。その支援者の数は年々増えている。

Q2.学習支援に通う子どもたちに対して思うこと

もう子どもの学習支援の担当ではないので、去年思っていたことについて。去年は十分な学習機会を与えたいと思っていた。例えば、あの子たちの中には下の子の面倒を見よだとか、家事を手伝うだとか家庭のことをやっている子が多い。そんな中で、自分の学習する時間をなんとか確保しなければならなかった。そのために学習支援がある。少なくとも、ここに来ることによって家庭とは離れるから、土曜日の 9 時から 16 時までは勉強に集中できる。学習のための環境を与える場であるので、なるべく保護者にも理解をしてほしいと思っていたことが一つ。

次に、進路について。生活困窮家庭の子の中学校を卒業してからの行先は定時制高校が多い。定時制に行くと働きながらの勉強となり、忙しさゆえに学校をやめてしまう子もいる。しかし、中学校を卒業し、定時制に行こうがステップに通って勉強を続け、無事に高校も卒業してほしい。最終的には正規雇用で就職できるといいと思う。

もう一つは“世話をされる側”から“世話をする側”になってほしい。例えば、ここを卒業して高校生になっても中学生や小学生に勉強を教えたり、社会人になったらその給料の一部を寄付するなど。大人になっても何らかの形で関わり、次の世代を支援していってほしい。このような循環型のシステムが構築できると良いと思う。

第 4 項　インタビューその④

最後に、インタビュー④では地域福祉グループ子ども健全育成支援員・箕浦のインタビュー内容を記録する。伺った質問は「Q1. 学習支援に通う子どもたちに対して思うこと」「Q2. コロナ禍において感じている今後の課題」の二点。インタビュー内容は以下に記す。

Q1. 学習支援に通う子どもたちに対して思うこと

この支援は“学習支援”という名前を用いているが、単純に「子どもたちの学力を上げたい」とはそこまで考えていない。それより、「子どもたちが社会に出たとき自立できる」ということを一番に思って支援している。

うまいこと人と関わって人間関係を築く、ということを苦手とする子どもが多くいる。本来ならば、子どもたち同士で話し合い、互いに学び合う機会をたくさん設けたいが、コロナ禍である今はそれが出来ない。学習支援に関してはむしろ、コロナ禍によりチャレンジサポーターと 1 対 1 での学習になっており、今までより集中して勉強に打ち込めている。学習のできる環境は整っているが、子どもたちにはもっとコミュニケーション能力のようなものを身につけてほしい。将来、世に中に出ていった時にきちっと自分を表現できて人と上手に関係を築ける、そんな子になってほしいと思っている。コロナ禍ではその部分がどうしても欠けてしまう。

Q2.コロナ禍において感じている今後の課題

逆に、今は学習面においては 1 対 1 で行える良さもある。このような経験も大事にしながら、キャリア教育講座の内容をもっと良くしていきたい。さまざまな講座をアスクネットや南部まち協などに協力いただいているが、その中でも将来生きていく上での力を身につけるためのキャリア教育という部分を強化したいと考えている。過去、イベントの「みらいワーク」として資格を取ってそれを仕事に活かす職種の方に依頼し、高校生を対象に講座を行ってもらった。このような講座を中学生にも行えるといいと思う。キャリア教育は中学生の進路相談においても、とても重要である。しかし、コロナ禍ではイベント活動は行えていない。流しそうめんやクリスマス会など、地域の人と楽しみながら行うものがほとんどできなかった。来年も開催できるか分からず、危ないと思っている。

終章　これからの子ども食堂

第 1 節　本章のまとめ

本章では、子ども食堂「すこやかサタディ」の立ち上げの経緯とコロナ禍における活動内容の変化についてまとめ、また、支援される子ども・支援を行う大人の両当事者の声を聞き、その想いを明らかにすることを目的とし、話を進めてきた。

一章では子どもの学習支援事業「ステップ」が高浜市の生活困窮者自立支援法のうちの一つとして始められ、その活動を行っていく中で夕食を支援する必要に気づき、子ども食堂として「すこやかサタディ」が誕生したことがわかった。すこやかサタディは対象者を定めず、誰でも参加可能であるが、そのほとんどがステップ及びステップ・ジュニアに通う生徒である。よって、すこやかサタディは生活困窮家庭に属する子どものための貧困対策となっているといえよう。始まった当初はひとつの仲良しグループがカラオケを占領するなどしていたが、これまで三年間（2020 年度を除く）活動を続けているうちに、子どもたち同士でカラオケの順番を決め、分け隔てなく一緒に遊ぶようになった。また、あいさつがしっかりできるようになるなどの成長も見られ、すこやかサタディが子どもたちを人間的に成長させる場となっていることがわかった。

二章ではコロナ禍によってこれまでと同じ様に活動できない学習支援事業及び子ども食堂についてまとめ、その参加記録を記した。三密（密閉、密集、密接）を避けるため、学習支援では 2〜3 人の生徒に対しにチャレンジサポーターが一人という制度が 1 対 1 に。イベントの開催は軒並み中止で、昼食支援は人数を半分に分け二部制となった。また、こまめに消毒し、ドアは常に開放することで換気を行っている。子ども食堂は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、地域共生型福祉施設あっぽの利用が不可能になり、活動停止。活動再開後は弁当を作り、申込のあった分を配達する方法に切り替えた。弁当作りでは調理ボランティアは手袋をつけ、常に換気をすることで対策を行っている。筆者の支援活動参加記録においてはメニューと人数、寄付食材などを記録。

三章では子どもたちにアンケートを行い、支援を行う大人にはインタビューを行った。コロナ禍により、お互いの感想を聞く機会は減ってしまった。このような状況こそ、今回の調査が役に立てばと思う。

第 2 節　これからの課題

最後に、本稿の二つ目の目的であるこれらの活動記録や調査から見えてきた今後の課題について論じる。

まず、疑問に思ったのはすこやかサタディの運営が南部まち協のみであることだ。前述の一章「これまでの活動内容」にて示した通り、すこやかサタディに通う子どもたちは高浜市全域から集まっている。その比重でいえば、南部まち協のある港学区の参加人数は下から二番目であり、一番多いのは翼学区、次いで多いのは吉浜学区の子どもたちである。高浜市には南部まち協の他に、吉浜まちづくり協議会・翼まちづくり協議会・高浜まちづくり協議会・高取まちづくり協議会と、各小学校区に一つ、まちづくり協議会が存在する。すこやかサタディに高浜市全域からの子どもたちが集まっているのならば、この運営は市に存在する五つのまち協で行うべきではないだろうか。現在は子ども食堂の予算は南部まち協だけでまかなっている。これでは些か不平等であるように感じる。

しかし、五つある全てのまち協がすこやかサタディの運営者となれば齟齬が生じ、うまく立ち行かないだろう。そこで、各小学区に一つ子ども食堂を作り、それぞれ運営を分けると良いのではと考える。既に港学区の子ども食堂にはすこやかサタディがあるため、要するに、その他の小学区に新たな子ども食堂を開設するという案である。すこやかサタディ参加者の多い翼・吉浜学区の子どもたちにとってはステップ後の移動が少なくなり、都合がいいのではないだろうか。

このことについて高橋に質問したところ、当時、子ども食堂立ち上げる前段階では高浜市に二つ子ども食堂を作りたかったそうだ。吉浜か高取学区でやってほしかったとのこと。いきいき広場がステップに引き続き、そのまま使えるのならば一番よかったが、この施設の利用時間は 17 時までであるため、それは叶わない。ならば、北と南に子ども食堂をと考えたそうだ。しかし、実際はそこまで至らず、高橋は「子ども食堂のシステムを作ることは非常に骨が折れる作業だ。すこやかサタディが立ち上げられたのは南部まち協の義国さんが居たからこそ。」と述べていた。この件については水野も同じことを述べ、「漢文に“先従隗始”という言葉がある。先ず、隗より始めよ。これは物事に挑戦するに当たっては最初に言い出した者がまずは取り組むべきだという意味で、義国さんはこれを実際にやっている人。だから周りの人はついていく。」と語った。

過去に子ども食堂の候補として挙がったのは、吉浜まち協の「ぽっぽっぽ」と高浜市商工会の「T ぽーと」があったそうだ。商工会は何度かあっぽに見学に来ていたが、今ではその話はどちらも流れてしまい、実現には至っていないとのこと。神谷のような熱意と行動が伴っている人がなかなかおらず、立ち上げたくても皆が話に乗ってこない事には立ち上げられないことがわかった。また、協力団体を募るにしても、相手の存在を知らなければ声もかけられない。子ども食堂を立ち上げるということは、詰まる所、人と人とのつながりが最も大切であると高橋は言う。

よって、はじめに挙げた各小学校区に一つ、子ども食堂を立ち上げるという案は現実的では無いと知ったため、この案を改め、北と南に一つずつ子ども食堂を立ち上げるという案を推していきたい。南にすこやかサタディ、北に新たな子ども食堂というシステムを作り上げる。新たな子ども食堂開設には流れた話を再度議題に挙げるなどして、高浜市の諸団体のやる気を引き出す必要があると考える。

だが、仮にこの話がうまくいったとして、新型コロナウイルス感染症が終息しなければ子ども食堂の活動は再開できない。感染症対策として換気や消毒をこまめに行いながら、対面での食事や会話をしながらの食事を避け、活動を再開することは可能だろう。それでは子ども食堂の良さが消えてしまうが。一刻も早く元の環境に戻り、十分な支援が行えるようになることを願うが、それは数年先の話であろう。そもそも元の状態に戻ることなどできるのだろうか。コロナの時代と寄り添っていかなければならない、これからも子ども食堂の在り方として筆者の考え得る最善の策は、現在南部まち協が行っている対応と同じ、弁当配布だ。フードパントリーのような食材を配布するのも新しい支援の形だろう。しかし、今までの子ども食堂の良さ、つまり“地域の人が手助けしてくれている”ことを感じるには気持ちの籠った弁当を届けることが一番いいのではないだろうか。今までと同じようには支援できずとも、変わらず支え続けるという意思が弁当の方が伝わると感じる。コロナ禍において人と人とのつながりが更に薄れている今だからこそ、この活動はやめてはならない“地域のつながり”であると考える。

【参考文献】

成元哲，2020,「コロナ禍の子ども食堂－食卓をめぐるソシアビリテの変容」『特集・コロナと暮らし－対策の現場から』48（10）：49－56.

特定非営利活動法人高浜南部まちづくり協議会，2017,「子ども食堂すこやかサタディ開始の状況説明資料」1－2 項.

特定非営利活動法人高浜南部まちづくり協議会，2018,「学習支援事業と地域との連携について」5 項，学区別生徒・児童数

樋口耕一，2020,『社会調査のための軽量テキスト分析【第 2 版】-内容分析の継承と発展を目指して』株式会社ナカニシヤ出版.

【謝辞】

本論文の執筆にあたり、多くの方々にご支援いただきました。本研究のためにアンケートに回答してくださったステップに通う生徒のみなさんに心から感謝いたします。そして、インタビュー調査にご協力いただいた南部まちづくり協議会の子どもグループリーダー神谷義国氏、水野輝久理事長、スクールソーシャルワーカーの高橋正氏、地域福祉グループ子ども健全育成支援員の箕浦博夫氏には、ひとかたならぬお世話になりました。ありがとうございました。指導教員の成元哲教授には研究の着想から、調査、論文執筆まで多くのご指導をいただきました。心から感謝申し上げます。最後に、所属する成ゼミのみなさまには多くのご支援いただきました。お礼申し上げます。ありがとうございました。